



理学療法学科

講義・演習、実習を通して、最新の知識・技術を提供しています

理学療法士は幅広い分野での実践を社会から期待されています。こうした現状を踏まえ、さまざまな分野で、質の高い理学療法を提供できる専門職として社会に貢献できるように、幅広い教養と専門的な知識・技術の基本を効率よく修得できるようにプログラムを提供しています。その結果、国家試験についても、毎年高い合格率を誇っています。



3つの特色

1

少人数だからできる
細やかな指導

充実した設備の実習室を備え、各分野の専門教員によって、一人ひとりが確かな技術を身につけられるよう指導します。

2

地域社会・国際社会に
貢献できる専門職の育成

人々の健康のためにさまざまな場所や立場で貢献できる「実践力」を鍛えます。

3

自己研鑽ができる
人材の育成

総合臨床実習を通じ、自ら解決すべき課題を見つけ、取り組むための総合的な知識と技術を修得していきます。

●取得可能な資格・免許

- 学士（理学療法学）
- 理学療法士国家試験受験資格

理学療法士の免許を取得したのちには実践経験に基づいて、介護支援専門員（通称：ケアマネージャー）や、関連医学会の認定資格の受験資格を得ることができます。

●理学療法士の仕事

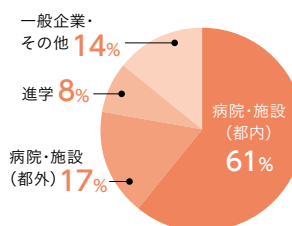
理学療法士は、病気やケガのために不自由になった「起きる」「立つ」「歩く」などの基本的な動作能力を回復するための治療やトレーニングをするのが仕事です。対象者が社会生活を送るための住宅環境を整えたり、訪問理学療法などを行ったりすることもあります。

●国家試験合格状況（2025年実施）

資格名	受験者	合格者	合格率	全国※
理学療法士	36名	35名	97.2%	89.7%

※既卒者を含む

●進路情報（2025年実績）



●主な進路先

令和あらかわ病院、南東北グループ 医療法人財団健真会 総合東京病院、南東北グループ 医療法人社団三成会 新百合ヶ丘総合病院、地域医療機能推進機構（JCHO）、慶應義塾大学病院、株式会社 LITALICO、東京都立大学大学院

4年間の流れ

1年次	2年次	3年次	4年次
<p>教養科目を幅広く学び、専門教育科目の学修もスタート</p> <p>基礎医学科目の解剖学、生理学、運動学および基礎理学療法学科目を学修します。</p>	<p>専門科目の学修が本格化し、様々な分野を幅広く学ぶ</p> <p>臨床理学療法学科目を学びます。学年末には臨床実習を行います。</p>	<p>実習や演習が増加し、専門科目を深める学習により臨床実践能力を養う</p> <p>学年末には各医療機関の指導者による指導のもと、総合臨床実習を行います。</p>	<p>幅広い選択科目や臨床実習により、理学療法の幅を広げ、臨床実践能力の向上をはかる</p> <p>総合臨床実習に加え、卒業論文作成、国家試験対策などにも取り組みます。</p>

授業紹介

2年次

機能・能力診断学演習

田島 敬之 准教授

理学療法の検査方法について学びます

運動機能障害を調べる方法のひとつである徒手筋力検査法を解剖学・運動学を復習しながら実技を通して学びます。

2年次

中枢神経系理学療法学

池田 由美 教授

脳卒中の理学療法に関する基礎を学びます

脳卒中の病態と障害像から、検査・測定の選択-理学療法手技の選択といった理学療法のプロセスと理学療法介入の基本を学びます。

3年次

徒手理学療法学実習

来間 弘展 教授

徒手療法に関する基礎を学びます

理学療法の基礎となる徒手療法に重点を置き、徒手療法の系統別な考え方と各治療方法の治療手技・評価方法・適応等について学びます。

4年次

地域理学療法学

浅川 康吉 教授

地域理学療法学の理念、考え方を理解し、基本的知識を修得します

地域包括ケアシステムや地域で活躍する理学療法士像について主体的に考察するためアクティブラーニングを活用した授業を行います。



臨床実習

1年次から4年次にかけて、臨床実習を行います

実習前には、OSCEにより臨床実習が安全かつ効果的に行えることを確認しています。実習を通し、臨床実践能力を身につけます。

	前期						後期					
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年次						臨床見学実習						
2年次											評価臨床実習	
3年次					小児理学療法学（保育園見学実習）						総合臨床実習I	
4年次	総合臨床実習II				地域理学療法学臨床実習							

* OSCE (Objective Structured Clinical Examination : 客観的臨床能力試験)



PickUp 授業

運動学実習 [3年次]

金子 文成 教授 他

運動学に関する現象を計測機器を用いて解析し
身体運動の原理を深く理解します

運動学実習は、3年次前期に配置されている科目です。1年次に履修する「運動学I」、「運動学II」の実習科目になります。運動学I-IIで学んだ「人の運動に関する知識」を基盤として、観察や計測機器を用いて分析する実習を行います。実習項目は、①反応時間・筋伝導速度、②筋力・筋収縮、③姿勢(平衡機能)、④運動学習、⑤歩行解析、⑥心肺運動負荷試験に分かれ、身体の中で起こっている生理学的現象を外から観察し、身体運動の原理を学びます。実習では、項目ごとにあらかじめ立てられた計画に基づいて実験を行ない、得られたデータを解析します。データの解析においては、解剖学や生理学で学んだ知識と連携させて考察し、個人がレポートをまとめます。これにより、運動学に関する現象を科学的に深く理解する一連の過程を体験します。



在学生の声



理学療法学科2年
岸下 亜依さん
(2025年度現在)

専門的な知識が広がることで
将来の可能性も広がっていく

もともと高齢者向けの理学療法に興味があり、1年次の見学実習で回復期のリハビリテーション病院を訪問できたことは大きな学びでした。2年次からは、理学療法士が対応する患者さんに多い、具体的な疾患・病態とその原因を学んでいます。この過程で変化したのは、将来への見通しです。入学前は「理学療法士は病院に就職」というイメージでしたが、企業への就職や、スポーツ分野に進む道など、選択肢はさまざまです。視野を広げて将来を考えられるようになり、今では大学院で研究を深める道も検討しています。また、少人数の学科で居心地がよく、実技の練習でも協力しながら上達していける環境です。

岸下さんの時間割

	月	火	水	木	金
1限	医療英語a	筋・骨格系 理学療法学 実習	中枢神経系 理学療法学		解剖学実習
2限	小児科学				
3限		中枢神経系 理学療法学 演習II	中枢神経系 理学療法学 演習I	機能・能力 診断学実習II	
4限	整形外科学II				
5限					

2年次は、病態とその原因について理解を深める段階。前期の「解剖学」で得た知識をベースにして、「中枢神経系理学療法学演習」では脳卒中や脊髄損傷について学びます。神経がダメージを受ける原因とその影響をグループワークで考えるほか、患者役と理学療法士役に分かれるロールプレイもあり、患者さんの意欲を高めるための接し方や声かけ方法なども練習しています。

PickUp 授業

日常生活活動学 [2年次]

浅川 康吉 教授、信太 奈美 准教授

身体の不自由な人が生活していくための方法を学びます

日常生活活動 (ADL: Activities of Daily Living) とは食事・排泄・更衣・入浴・整容・歩行などの身の回りの基本的な動作を表します。病気や怪我などにより、身体に障がいを負ってしまった方が通常の暮らしを行うことができるようになるための方法を学びます。障がいの程度により一人ひとりのできることやできないことが異なるため、どの程度であれば一人のできるのか、身体機能を調べ、どのような支援や道具があったらできるようになるのかを考えます。それらを理解したうえで、どのような指導や支援方法があるのかを提供できるように学びます。また、これらを総合的に学んでいくことで、住宅改造や装具、自助具などの福祉機器の選択へ展開できる知識を修得することを目指します。



卒業研究

希望する研究分野で、4年次までの講義や実習を通して得られた専門知識を活用して、教員の指導のもと、各々の研究テーマに関する学習・討論をしながら研究を進めていきます。

VOICE



卒業研究を完成させていくプロセスは卒業した今も大いに役立っています

二羽 香菜都さん
16期生

「視覚的指標の階調変化が姿勢制御に及ぼす影響について」というテーマで卒業研究を行いました。3年次に行った運動学実習で、私自身が視覚に依存した姿勢制御戦略をとっていることに気づいた経験から、姿勢制御と視覚の関わりに興味を持ちました。過去に発表されている数多くの論文や先生からのアドバイスをもとに、視覚に依存した姿勢制御戦略をとる人ほど視覚的指標の階調変化に影響されやすいと仮説を立て、研究を行いました。視覚的指標の提示には Head Mounted Display を、姿勢制御の評価には重心動揺計を使用しました。先生方や被験者の皆さんに協力してもらいな

がら予備実験を重ね、何度も実験方法を検討したことが印象に残っています。研究が思うように進まず辛いこともありましたが、妥協せずに研究を行い、発表できた経験は大きな自信となりました。現在は回復期リハビリテーション病院で理学療法士として勤務しています。卒業研究を通して学んだ知識や技術、データ分析力は、日々の臨床にも生きており、エビデンスに基づいた理学療法の提供に役立っているように感じます。今でも姿勢制御や視覚に興味があるので、これからも目の前の患者さんと向き合いながら学び、探究する姿勢を続けていきたいです。

